

SIOME

シオメ：海とアートとサイエンス

SUMMER 2025



創刊準備号

さわる、ひらく、ひろがる
Touch, Open, Expand.

特集 | SPECIAL

ぐんだらけ [東かがわ市引田]

FREE

東京藝術大学×香川大学連携事業

自身の存在の特徴は

自分自身ではわからないものである。

自分にはないものを持っている者と出会った時に、

その特徴に気がつくものである。

自身の中で常識だからこうしなくてはならないものだと

思い込んでいたものが、

異なる価値観をもっている者と出会った時に、

自身で自身の発想力に蓋をしていたことに気がつく。

アートとサイエンスとの出会いにも、

このような事が起こるであろう。

大海原に漂う水質は、

一つだけを見ていても見えてこないけれども、

異なる水質のものが出会った時に、

その存在が潮目とともに見えてくるのであろう。

もともと同じ水なんだけれどもね……。

日比野克彦

東京藝術大学長・芸術未来研究場長

アートとサイエンスの力で人々の心を豊かにし、社会の未来をかたちづくる。

東京藝術大学と香川大学は、創造力と分析力を融合させることで、複雑な社会課題に新たな視点からアプローチし、心豊かで持続可能な社会の実現を目指しています。

芸術と科学の出会いから生まれる知と感性の共創によって、瀬戸内海から未来を動かします。



なんとなく、
やっていけないか。
小さな港町の
大きな変化。

特集 | SPECIAL

ぐんだらけ

〔東かがわ市引田〕

香川県東かがわ市引田。

空き家が点在する小さな港町で、東京藝術大学と香川大学が「ぐんだらけ」プロジェクトを始動。

「なんとなく、やっていけないか」。

地域の方言から名付けられた活動が、
日本の地方再生の新しいモデルを模索する。

文・井上英樹 写真・川畑彩夏





1 近隣から赤い物を借りて作り上げた馬場さんの作品。2 瀬戸芸で栗原寿行さんの作品を展示する煙突広場。3 家が減り間に空き地が目立つようになった街並み。
4 馬場さん(左)と三谷さん。5 看護学生が地域調査を行う際、ぐんだら家が拠点として使われた。6 馬場さんたちが歩くと、町中で声をかけられる。7 「はじめはよくわからなかった」と話す尾崎照子さん。8 時代ごとに町の大切な役割を果たしてきた松村家。2025年、新たな場所として生まれ変わる。9 香川大学の学生たちもまちづくりに参加している。10 町のあちこちで見かけるハマチの置物。

瀬戸内の小さな町で

車なら、あっという間に通り過ぎてしまうかもしれない。香川県東かがわ市の引田^{ひけた}は、瀬戸内海東部の播磨灘に面した港町だ。かつては城下町として栄え、醤油や和三盆、そして全国シェア9割を誇る手袋産業で発展してきたこの町は、世界で初めてハマチの養殖に成功した地としても知られる(私たちが安価にハマチを食べられるのもこの町の功績だ)。

近隣にはうず潮で有名な鳴門があり、観光客や釣り人が訪れるが、引田まで足を延ばす人は少ない。通りを歩く観光客はまばらだ。ただ、おかげで引田には瀬戸内の昔ながらの暮らしがある。しかしその一方で、この町には深刻な現実が突きつけられている。空き家問題だ。

古い建物群は、軒や屋根の高さ、門扉や建材が連なり、美しい調和を生み出している。引田の街並みにはそれに加え、海へと続く細い路地がある。路地を風が通り抜け、人や猫が行き交う。だが今、その町並みには空き地や、何年も閉ざされたままの家が点在している。こうした家を放置すると、雨水に侵食され、動物に荒らされ、やがて廃屋となる。家の解体や残置物の処分には莫大な費用がかかる(実際に残置物のある家を見学させてもらったが、素人には手に負えない状況だった)。これは引田に限らず、全国で起こっている現象だ。

2023年時点で国内の空き家は約900万戸、空き家率は13.8%。香川県では18.6%で全国ワースト10位に入る。東かがわ市は県内最大の人口減少率(8.9%)を記録し、高齢化率は42.7%に達している。若者の流出が続く、家の維持が難しくなっている。町や家を再興するには、若い世代の力がどうしても必要だ。

「ぐんだらけ」な連携のはじまり

そんな引田で、意外な連携がはじまった。東京藝術大学と香川大学という異色の組み合わせだ。「離島問題や過疎化は全国的な課題で、瀬戸内海は日本の未来の縮図。アートやサイエンスがこうした問題にどう関わっていけるのか」と思い参加した」と話すのは、引田出身の三谷なずなさんだ。三谷さんは香川大学で学んだ後、神奈川県にIT企業に就職。現在も会社に籍を置きながら香川大学のイノベーションデザイン研究所特命助教を務める。外と内、両方の視点を持つ三谷さんは、「地元の人間として、外から来る人たちとの協働に可能性を感じている」という。

両大学はすでに高松市にある地域型研究拠点「芸術未来研究場せとうち」をベースに、アートと科学技術による地域課題の解決に取り組んでいる。この施設は文部科学省の支援で整備され、地域の豊かさを心の面から再発見しようというプロジェクトだ。

「ここも空き家。ここもです」と案内してくれたのは馬場悠輔さん。東京藝大建築科を卒業後、引田と東京を行き来する二拠点生活を送っている。馬場さんや三谷さんが関わるのが、地域の方言で「だらだら話す」を意味する「ぐんだらけ」プロジェクト。茶や酒を酌み交わしながら、過去と未来を語り合う場を町に根付かせようとしている。

活動拠点となるのが「ぐんだら家」だ。馬場さんたちは江戸時代末期築の登録有形文化財・松村家住宅を改装している。この場所は引田を訪れるアーティストや学生が滞在しながら制作に取り組める。また、さまざまな立場の人が対話する「コンズミーティング」の場としても機能する。

芸術未来研究場せとうちの特任准教授を務める宮崎晃吉さんは、東京・谷中で築68年の木造アパートを改修した最小文化複合施設「HAGISO」(ダイニングカフェ・ギャラリー)を運営し、空き家再生のノウハウを持つ。この宮崎さんの発案により、松村家住宅を拠点とすることが決まった。

馬場さんに建物の中を案内してもらった。「地域の人も、外部から来る人も、大学生も研究者もアーティストも、みんなが何かできる場所のハブにしたい」。制作スタジオとしても、講演会場としても、時には料理を囲んでの交流の場としても使える用途を限定しない柔軟性が、ぐんだら家の特徴だ。アートだけでなく、香川大学主体の看護分野での健康調査、防災、空き家問題の研究活動も展開される予定だという。東京藝大と香川大によるアートとサイエンスの垣根を越えた実験が、引田で静かに始まろうとしている。

なんとなく、やっていけないか

馬場さんは町を歩き、人と話しながら空き家マップを作成した。防犯の観点から公表はできないが、その地図には多くの空き家マークが記されていた。マップを見た後に歩くと、この町並みが抱える危機がリアルに浮かび上がる。

「昔は、歩いていても「よそ者」扱いで声をかけられなかった。でも今は違う。馬場君や三谷さんたちのおかげで知り合いができ、声をかけてもらえるようになった」。そう話すのは、プロジェクト統括の柴田悠基さん(香川大学)。地域や自治体と対話を重ねる中で、人々が抱える問題の多様さと複雑さに気づいたという。

「人口が減る、商売が成り立たない、医療サービスが届か

ない。人それぞれで視点が違えば課題も違う。ぐんだらけでは『この問題を解決しよう』と一点突破を目指すのではなく、『なんとなく、やっていけないか』という柔らかさを大事にしています」

「なんとなくうまくやる」。都市計画や行政、企業の口からは、およそ耳にしない言葉だ。頼りなくも思えるかもしれないが、外から来た人が力業で劇的に町を変えるより、地元のペースに寄り添う現実的な道なのかもしれない。柴田さんはぐんだらけプロジェクトを用い、町を「副次的」に変えていきたいと考える。

「たとえば、引田でイベントをする時に、複数の問題を同時並行で考えられるプロジェクトをやってみる。そもそも、全ての問題に対応することなんてできないし、一つだけにしても他が対応できていない。だったら、一つの活動で複数の課題にアプローチする。メインの目的があっても、その周辺でいろんな課題にも効果が波及するような取り組み方です」。つまり、ぐんだらけ自体が町の課題を解決するわけではない。しかし、ぐんだらけに関わることで交流が生まれ、問題が可

視化され、それを解決できる知見が集まる「手助け」の場になる。ぐんだら家を拠点に、かつて町に存在した機能を取り戻そうとしている。

赤いひな祭り

その理念を実践する場として選ばれたのが、引田ひな祭りだった。2003年にはじまった引田のひな祭りは、古い町並みの住宅や商店を中心に約60軒の軒先にひな人形が飾られる。「引田飾り」と呼ばれる7段のひな飾りの両脇に市松人形を置く飾り付けが特徴だ。約6万人が訪れる「町一番の集客力のあるイベント」だという。

「すごいイベントなんだけど、20年前に始めたメンバーが続けています。次の担い手は見つかっていない。もし実行委員長が『もうやめよう』と言えば、その時点で終わってしまうかもしれない」と馬場さんは言う。

引田ひな祭りに合わせて馬場さんが企画した「引田褰飾りプロジェクト」は、そんな祭りに一石を投じる試みだった。「褰

とは「ハレとケ」の「普段」や「日常」の意味。赤をテーマカラーとし、家電製品、大漁旗、手袋などを住民から集めた。それらを組み合わせ、長さ8メートル、高さ2.5メートルのひな壇を作った。海側と街側に分かれがちな引田を「全部ごちゃごちゃで一つの塊」にしようという発想だった。住民や企業、空き家の所有者ら約40カ所から材料を借りた。

「せっかく認知度が高い祭りなのに、観光客はその一瞬しか来ない。どうせだったら、引田のことを知ってもらえないだろうか」と馬場さんは考えた。松村家住宅で起きた「変化」は、テレビや新聞などに好意的に取り上げられた。しかし、地域住民の反応は複雑だった。

「最初はね、何をやってるのか分からなかったですよ。赤いものをあちこちから吊るしたりして、ちょっとびっくりしましたね」。引田ひなまつり実行委員会の尾崎照子さんは苦笑いしながら振り返る。その表情から当時の複雑な気持ちが読み取れる。だが馬場さんとの関わりが続くうちに、少しずつ打ち解けていった。「まあ、孫みたいな子たちですし。気づいたら、うまく取り込まれてしまったんですよ」と笑う。

尾崎さん自身、地域の古い街並みと人の関係をもう一度結び直していきたいという想いから引田のひな祭りをスタートしたそうだ。「引田にしかないものを、どう残して、つないでいくか」。表現方法や美的感覚は違うが、馬場さんたちとの根本の思いは同じだ。だから「よくわからんけど」受け入れ、最終的には楽しんでくれた。徐々にではあるが、世代交代も進めようとしている。市の職員や地元の小学生らが手伝ってくれるようになったそうだ。「案外ね、ひな祭りって男の子のほうが喜ぶんよ」と、尾崎さんは少し驚いたように話す。小さな歯車が重なり、回り始めている。そして最後に、こんな言葉を口にした。「年は取ったけど、人と出会うことが、やっぱり楽しいんよね」。そう言って、尾崎さんは目を細めた。

「実は引田には、やる気のある人たちがたくさんいる」と馬場さんは話す。「しかし、それがやや分散している。小さな町の中に協会や保存会がいくつもある。みなさん、一人では無理というのは自覚している。問題は年齢層の高さ。仕事をしている60歳未満の人たちは余裕がなくて町を見ないし、そもそも上の世代じゃないと引田に思い入れもない。世代交代が進んでいないんですよね。こうした構造的な課題があるからこそ、外部の視点や若い世代の力が必要になる。ぐんだらけプロジェクトは、そのための「場」を作ろうとしている。問題を一気に解決するのではなく、対話を通じて少しずつ変化の兆しを生み出していく。

日本の地方再生のモデルに向けて

2025年8月、ぐんだら家は瀬戸内国際芸術祭2025の会期にあわせ一般開放される予定だ。また、香川大が中心となった実証実験も本格化する。アートとサイエンスの融合による地域課題解決の試みが始まる。

柴田さんは、引田での試みを「モデル化」することの重要性を強調する。「この事例を引田だけで終わらせるのではなく、モデル化することで藝大が全国で活躍できる場を作るきっかけにもなるし、他の大学もアートを使って何かできるかを考えるきっかけになれば」とぐんだらけの可能性に期待を寄せる。三谷さんも「今は私たちがぐんだらけを運営していますが、できるだけ主体を分散させ、自治体や地域の人たちと、ぐんだらけを運営するチームがを作ることが目標です」と話す。

引田が抱える課題は、日本全国に共通している。だからこそ、ここで生まれる「なんとなく、やっていけないか」という副次的な解決方法は、各地で応用できる可能性を秘めている。何かを作ったり、イベントをしただけでは地域が抱える問題は解決しない。しかし、変化をしなければ衰退する。それは空き家と似ている。放置していくといつか崩れてしまう。瀬戸内の小さな港町で始まった「ぐんだら」な対話は、日本の地方再生の新しいモデルとなるかもしれない。それは劇的な変化ではない。人と人とのつながりから生まれる、静かで小さく、しかし大きな変化だ。



中途半端な潮目のなかで 文・みたになずな 写真・川畑彩夏

引田の海まで抜けるまっすぐな路地を歩くのが、私は好きだ。メインの通りには立派な古民家が立ち並び、かつて繁盛していた商店の残り香がする。路地を歩き進めると、地元住民が何十年と通い続ける美容院、その後ろにひっそりと空き家が立ち並ぶ。海に出ると漁師たちの長い営みの中で積み重ねられた漁師道具が無造作にこんもりと積まれている。そしてその先に、瀬戸内海の穏やかな青。路地には、通りと共に染み付く複数の営み同士が無言に重なり合っていて、流れの違う潮同士がぶつかり合う「潮目」のようにも見えてくる。自分自身のあり方もまた、それに重なるところがある。私はずっと、「潮目」であること



「僕」と言いたい時もある。このエッセイも、書き言葉と話し言葉が行き来している。たいした問題にはならなくとも、きっと、誰にでもそんな感覚があるんじゃないかと思う。社会にあるさまざまな領域も、私個人の中にある、寄せては返す複数の自己認識も、しばしば互いを無視したり、受け入れ合えなかったりする。それは、なかなかもどかしい「中途半端さ」だ。けれど最近、そうした異なる流れを、いったん思いきりぶつけてみることに価値があると思うようになった。正しい順番で、正しいタイミングで交差させることで、互いの軌道は大きく揺れ動き、やがて可能性を引き寄せる「潮目」になれる（気がしている）。

PROFILE | みたになずな | 香川県出身、2000年生まれ。面白法人カヤックから在籍出向中。香川大学イノベーションデザイン研究所 特命助教を務める。専門はアートマネジメントおよびアートプロデュース。好きな食べ物は、ピザと杏仁豆腐。

を目指しているのかもしれない。引田のプロジェクト「ぐんだらけ」においては、このまちで生まれ育った地元民でありながら、大学という第三者的な立場からこのまちに関わっている。私のキャリアも、アートでもサイエンスでもない中間地点からはじまっていて、会社員であり、研究者でもあるような状態の中で、今なおその両方を行き来しながら学び続けている。地域と大学、芸術と科学。その間に立つ自分自身の存在を、日々問い直している。ふとしたときに、「中途半端だなあ」と感じることもある。24歳の私は、子どもに戻りたい大人であり、大人になりたい子どもでもある。「私」と言いたい時もあれば、

そういうわけで私は、「ぐんだらけ」において、アーティストも、科学者も、大学生も、地元の人、とにかくいろんな立場の人たちを、少し雑にでも出会わせてみることを楽しんでいる。中途半端な状態を、むしろ自分の強いアイデンティティとして受け入れることで、たくさんの感情を手に入れることができる。それが今、すごく面白い。どの方向に流れているのか曖昧なまま、でも確かに動いている。そんな中途半端な状態を自覚することができれば、面白いものをたくさん見つけられるはずだろう。ほら、潮目って、魚もよく釣れるって言うし。

外から見えてくる、地域と芸術・科学・医療の交差点

東京藝術大学・香川大学・香川県による協働の可能性 文・橋本和幸

東京藝術大学がある関東圏で暮らす私にとって、香川県の海と山が日常的にある風景は新鮮に映る。「海と暮らす」ことには、都市での日々とは異なる豊かさがあると感じさせられる。2017年、東かがわ市引田で東京藝術大学のアートプロジェクトに参加し、堤防から眺める瀬戸内の景色に心を奪われ、作品の撮影地として選んだ。しかし、その美しい場所が過疎化の問題に直面していると知ったとき、最初はうまく理解できなかった。だが、現地の人々と会話を重ねるなかで、風景の背後にある現実が少しずつ見えてきた。観光と日常のバランス、後継者不足、空き家の増加、老朽化するインフラ。こうした課題は都市にはない独自の構造を持っており、住民の暮らしに深く根ざしている。私は「外から来たアーティスト」として地域に入り、その土地の魅力を外に伝える役割を担ったが、活動が続けるうちに、単なる表現以上に「関係性のデザイン」の重要性を実感した。地元の人々の語りや記憶、生活の細部を丁寧にすくい上げ、それを共にかたちにする営みこそが、地域にとって本質的な価値となる。このような取り組みにおいて、香川大学の研究者と連携することは、科学的視点を加えることで地域の構造や資源を多角的に理解し、新たな創造の方向性を示してくれる。環境科学、社会学、情報科学などの分野は、アーティストが見逃しがちな側面を補完し、芸術の可能性を拡張する。さらに、香川大学には医療や看護の分野の専門家も多く、これもまたまちづくりには欠かせない視点である。高齢化が進む地域では、看護の現場から得られる知見や、地域包括ケアの実践が、人々の暮らしの質に直結している。医療と芸術が連携することで、身体や心のケアにまで届くような、より人間的で持続的な地域支援が可能になる。芸術・科学・医療。異なるようであり、いずれも人間の営みを深く見つめ、「見えないものを見ようとする力」を共有している。東京藝術大学と香川大学、そして香川県というフィールドが交差する場合は、そうした多様な視点が融合する創造的な拠点となる可能性を秘めている。外から来たからこそ見えるものがある一方で、外から来ただけでは決して見えないものもある。だからこそ、地域に関わる芸術やデザインには、技術や発想だけでなく、「耳を澄ます姿勢」と「関係を育む根気」が求められる。瀬戸内の穏やかな海を眺めながら、私は今、芸術・科学・医療が交差するこの地に、未来への大きな可能性を感じている。

潮目ノート

名の揺らぎ 文・柴田悠基 絵・ささやか

本誌『siome』というタイトルを、あなたはどのように読むだろうか。「シオメ」だろうか。それなら、“shiome”と書いた方が自然かもしれない。あるいは「サイオーム」？英語読みを意識すればそうなるだろう。私はこの言葉を、外に向けては「シオメ」と呼び、心の中では「サイオミ」と読んでいる。潮目（しおめ）とは、異なる潮流がぶつかり合う海の境界線だ。水温や塩分濃度の差によって生じるその帯には、魚が集まり、豊かな生態系が生まれる。また、潮目は、自然と暮らしをつなぐ語彙として、漁業や海の文化に深く根ざしてきた。この言葉が「siome」とローマ字で表記されたのは、1938年、海洋物理学者・宇田道隆が博士論文『Researches on “Siome” or current rip in the sea and oceans』を著したときである。この論文は、潮目という自然現象に対して「siome」という表記を用いた世界で初めての学術的文献であり、以後の海洋物理学における議論の起点となった。さらに1987年には柳哲夫が「Classification of “siome”, streaks and fronts」を発表し、潮目を海洋物理学の枠組みで分類・整理した。いずれの論文も、「siome」の読み方に関する注釈はない。つまりこの語は最初から、揺らぎをまとっていたのである。その後、国際的な可読性や発音の明確化のため、「shiome」という表記が主流となっていった。しかし、私たちのプロジェクトでは、あえて「siome」の綴りを採用し、「シオメ」や「サイオーム」といった複数の読み方を含めて、その揺らぎそのものに身を委ねている。これらはすべて誤読ではなく、むしろ異なる文化や制度、感性のズレこそが、新たな共鳴を生み出す起点になると、私たちは信じているからだ。たとえば、地元の漁師の経験知と海洋物理学者の数値モデルは、同じ海を語りながら、異なる方法でそれを捉える。ひとつの正しさに収束するのではなく、複数の視点が並置されることで理解はより多層的になるだろう。そこには衝突ではなく、異なるレイヤーが共鳴するような、共存の知のあり方がある。そうした「知の



潮目」が、私たちが本プロジェクトで追い求める場所だ。「名前の揺らぎ」は、そうした共鳴の入り口である。言葉が固定されず、音が分かれ、意味が交錯する。そこにこそ、創造が芽吹く余白がある。アートとサイエンスの共創においても、異なる領域の文脈が交わり、すれ違いながらも重なっていくことで、新しい想像の回路が生まれてくる。私は「siome」を「サイオミ」と呼び、その響きにどこか神話的な気配を感じている。それは、瀬戸内海に古くから漂う信仰の名残であり、海がもたらした神の名のようでもある。人と自然のあいだに流れる、目には見えない共鳴のようなものが、畏怖とともに“サイオミ”として私の中に息づいている。「siome」という名は、名付けるという行為を通して、私たち自身の立場や考えを映し出すと同時に、意味を定めようとするものと、他者の意味から離れていくことのあわいに立つものでもある。あなたにとって、この言葉は、どんな響きを持っているだろうか。

PROFILE | しばた・ゆうき | 香川大学 創造工学部 講師、現代美術作家。「情報社会が社会に与える影響」をテーマに幅広い手法で芸術表現を行っている。趣味は釣り。新しいタイラバの世界を開拓中。

